

論 文

ソーシャルワーク実践の認識構造「7次元統合体モデル」の 意義と意味

平塚 良子

(西九州大学健康福祉学部社会福祉学科)

(平成26年12月10日受理)

Significance of Seven Dimensional Integrated Model with Cognitive Structure of Social Work Practice

Ryoko HIRATSUKA

Department of Social Welfare Science, Faculty of Health and Social Welfare Science, Nishikyushu University

(Accepted: December 10, 2014)

Abstract

How can we say that a social worker does social work? It is not easy to say so. Because you need to identify that her action is exactly social work. In other words, social work practice must be recognized and visualized with logical structures.

In this article, author attempt showing ideas of and building the cognitive structural model of practice as the shape of an act by social worker's critical thinking. It means the overall picture of social work practice and also unique formation of social work, too. That is to say, this model reveals that the shape of an act by social worker creates and forms social work.

It will contribute to showing what social work is and what its practice is, to developing reflective thinking, critical thinking and thinking process of social worker in the field, and to social work education and supervision.

Author construct hypothetical framework as Seven Dimensional Integrated Model with cognitive structure of social work practice. Seven Dimensions are composed of Value-Purpose, Perspective, Function-Role, Method, Field-Setting (Space), Time and Skill. Each dimensions are interactive and influential. Main two dimensions: Value-Purpose and Perspective guide four other dimensions basically with functions of Skill dimension. Each seven dimensions must be integrated and It's integrated body must be logical, objective, consistent, and not contradictory. Also they move dynamically with each close relations and almost at the same time in social work practice. Then, original social work world is shaped and is formed finally through such integration and dynamics of seven dimensions. Author is verifying this model at present.

キーワード：ソーシャルワーク実践、可視化、認識構造モデル、クリティカル思考、7次元統合体モデル

Key word : social work practice, vidualization, cognitive structural model, critical thinking, Seven Dimensional Integrated Model

1. はじめに

ソーシャルワークは、生活困難(問題)を解決・緩和・抑止・予防のための目的、手段的な体系をもち、実践的な特性を発展させてきた。それは、他の専門職業と同様に問題解決機能を備える点では共通しているが、実践対象の特性から、象徴的には、人びとの権利擁護(アドボケート)を含む生活擁護(life protection: ライフプロテクション)機能を中核にしながらかつて多様なレベルでの社会変革機能を発揮する。しかし、このような機能を展開する今日の社会において、ソーシャルワーク、その担い手のソーシャルワーカーについては、正しく理解されているわけではない。理解困難な面が伴っているのである。全米ソーシャルワーカー協会(National Association of Social Workers 以下、NASW とする。)とM.ジベルマン(Gibelman, M. 1995)による会員対象の調査研究によれば、ソーシャルワーカーの役割、職場や実践主体の多様さ、ソーシャルワーク実践者自体がもつ異種性が明らかにされたことがある⁽¹⁾。また、ソーシャルワーカーは専門職というより何をしているか、どこで働いているかによってみられる傾向があると指摘されている⁽²⁾。これらがソーシャルワークのとらえにくさを映し出しているのであろう⁽³⁾。規模は異なるけれども、日本においても、同様な傾向にある。それは、かつてアメリカが経験してきたようなソーシャルワークの専門分化や断片化、ソーシャルワーカーのアイデンティティの拡散を招きかねないということでもある。

重要なことは、ソーシャルワークとは何か、その実践とは何かを明確にしておかなければならないということである。基本的なこととして、ソーシャルワーク事象に対する統合的な思考、実践のための全体的、統合的な認識枠組みをもたなければならない。ソーシャルワーカーのしている行為がソーシャルワークというかたちとして認識できる構造の構築とその可視化が重要な課題となるのである。加えて、ソーシャルワーカーがそうしたことを主張できるかどうか問われてもくる。

本稿は、ソーシャルワーク実践の可視化のための第一段階として、筆者の仮説的な認識構造「7次元統合体モデル」について言及するものである。本稿では、ソーシャルワーク、ソーシャルワークの実践とは何かを探った3つの論考から、ソーシャルワーク実践を可視化するモデルの着想を得ている。これらがもつ意味を明らかにすることで本稿の背景的理解を深め、認識構造モデルとして組み立てた「7次元統合体」とは何か、その意義や意味について言及する。

2. ソーシャルワーク実践の認識構造モデルの萌芽とその意味

ソーシャルワークの実践とは何かを明らかにしようとする筆者の研究(ソーシャルワーク実践の可視化)にとって重要な示唆を与えた約60年近く前のアメリカの3つの論考をたどることにする。これらは、ソーシャルワーク実践とは何か、構造的に認識しようとするモデルの萌芽形態を表すとともに、そのための重要な含蓄を提示している。

1) ソーシャルワーク実践の作業定義とその課題

アメリカにおけるソーシャルワークは生活問題を解決するための方法に関わる知識の蓄積に偏重し、実践方法優位の知識基盤の形成を促してきた。このことによって、技術化された多様な方法が進展し、教育、研究、実践において貴重な成果をもたらしたのはいうまでもない。しかし、その一方、すでに触れたようにソーシャルワーカーが配置される分野が多様なため、専門分化した領域で特定の概念や方法に依拠する傾向を招来した。こうした傾向がソーシャルワークのアイデンティティの拡散を引き起こし、ソーシャルワークの危機を招いたことはよく知られる。1950年代半ばにこれを転換すべくNASWが設立されたのもそうした危機意識による。NASWでは、このような状況に対する反省と転換を志向し、H.M.パートレット(Bertlett, H. M.)を委員長として作業定義に取り組み、それを1958年に『ソーシャルワーク』(2)4月号でWorking Definition of Social Work Practiceとして公表した。

作業定義では、ソーシャルワーク実践は、他の専門職の実践同様、①価値、②目的、③サンクション、④知識、⑤方法、からなる一つの集合体(constellation)とされている。同委員会では、1つの要素だけではソーシャルワーク実践の特性が示されないし、これらの諸要素はソーシャルワークだけに固有のものではない。諸要素の特有の内容や全体のなかでの配列によってソーシャルワーク実践が形成され、他専門職との相違が示されるとみなされた⁽⁴⁾。この見解は、ソーシャルワークの固有性を明示するうえで重要な指摘であろう。したがって、同委員会では、専門分化したものをすべて含めたソーシャルワーク実践を包括していけるように構成内容の明確化を試みたという。

しかしながら、作業定義では、ソーシャルワーク実践とは何かについての言及や定義は見られなかった。価値や目的、知識のそれぞれがもつ意味については触れられず、項目内容が列挙されているにすぎず、課題が散見された。作業定義は、暫定的なものとはいえ、松井二郎(1975)がいうように、ソーシャルワーカーの行為(ac-

tion)に焦点化し、その全体像を包括的に示すことを試みたものとしての意義はあろう⁵⁾。

作業定義は、ソーシャルワーク実践に対する認識的な構造を示そうと試みた点では、画期的なことかもしれない。それは、ソーシャルワークの実践の何を認識すべきなのか、その枠組みはいかにあるべきか、重要な論点を示唆した点で意義がある。作業定義における重要な課題は、実践を構成する諸要素がいかなる特性を備え、具体的にどのように関係し合い、関連し合っしてソーシャルワークとしての実践が構成され、実践がどのように見えるのか、実践に対する認識のありようを構造的に示し、それがどのようなことといえるのかなど、諸要素のつながりとその全体像が示されているわけではない。この点については、作業定義策定後にNASWで組織された第二委員会における作業定義の検証に引き継がれる。委員長のW.E.ゴードン(Gordon, W.E. 1962)は、作業定義では、ソーシャルワーク実践とは何であるかについての言及はなく、集合体の列挙的な説明にとどまっているにすぎず、次のような3つの限界があるという⁶⁾。なお、下線は筆者による。

(1)作業定義はソーシャルワーク実践をどのように認識するか(how to recognize)を述べているが、ソーシャルワーク実践とは何であるかについての認識には言及していない。作業定義の実践者の行為をソーシャルワーク実践として、あるいは、ソーシャルワーク実践でないという分類は有用かもしれないが、何がソーシャルワーク実践であるかについての断定がなされるまで理論的可能性はないだろう。

(2)作業定義では価値、知識、方法、サンクション、目的という構成要素は分離し、互いに等しく位置づいているように見え、その実践がソーシャルワーク実践であるとみなされる程度において全構成要素が存在するに違いないという断定によってのみ構成要素がともに保持される点を明白にしたこと。これが理論的な有効性をもつには、ある概念モデルの要素はそれらの間に存在する関係を陳述する命題を持たなければならない。

(3)構成要素を分離したまま示した結果として、作業定義は、それ自体を他の枠組みに容易に関連づけない、あるいはさらなる含意(implication)や仮説についての演繹(deduction)を容易に可能にしない。それだけにその構成要素が機能的に関連づけられない限り、さらなる研究と発展を導く役に立ちそうにない。

以上のゴードンの厳格な指摘は、ソーシャルワーク実践とは何か、それを主張するためのある概念モデルの構成要素間の関係を示し、諸要素が関連し合う機能の明確化をはからなければならないことを示している。ゴードンは、各構成要素についても検討し修正を試みながら、サンクションを構成要素から除外している。また、「方

法」という要素も明示するには扱いにくいと考え、ソーシャルワーク実践は社会システムあるいは(社会)過程に向けた実践者による行為という点から「方法」ではなく、専門職の介入とテクニク(技法)(professional intervention and techniques)にすべきと主張する⁷⁾。

パートレットによれば、当時の関係者が実践の部分的な側面にとらわれていたため、作業定義は、ソーシャルワーク実践の基本的特質と構成要素に関する問いを促すところとなった。ただ、作業定義の意味以上に、「専門職の実践の思考過程」について刺激したともいう。ゴードンらの第二委員会は、構成要素の性格と相互の関係を徹底していく検討の必要を認めたことや成熟した専門職が知識と価値の強力な総体に基づいており、そこから実践者の活動を導く科学的および倫理的な原則が導き出されていることを認めたという。パートレットは、このようなことから、知識と価値の方が方法よりも優位にあり、そして知識と価値が主として方法と技法を規定しているとする⁸⁾。

2) ベームの「ソーシャルワークの本質」

同時期のW.ベーム(Boehm, W.W. 1958)の論文「ソーシャルワークの本質」(The Nature of Social Work)⁹⁾も、ソーシャルワーク実践の認識全体像に関わる論点を示している点で見逃せない。同論文は、作業定義と同年の同じ2号に掲載されている。同論文では、ソーシャルワークを構成する諸要素を「価値」、「目標」、「機能」、「活動」とし、各要素の関係を含めて示し、ソーシャルワークの定義を試みている。

ソーシャルワークの価値については、民主主義社会で認められている価値を基本的価値とし、ソーシャルワークは追究する目標がその価値と矛盾しないようにするが、他面において、社会全体に持っているソーシャルワークの責任は、社会の支配的な価値と合致しない場合、社会の良心として、社会の他の領域から違和感をもって見られる価値を選択、解釈することがあるとする¹⁰⁾。

ベームの価値についての見解は、ソーシャルワークが独自の価値と機能を内包する社会制度であることを主張するものである。価値や機能の独自性とはいえ、それはまた、ソーシャルワークが社会との関係において葛藤をもちやすい独特な制度であることを意味している。

目標については、社会的機能の質を高めることにおき、人々の社会的な役割遂行の活動と関係づける。このことからソーシャルワークが向ける関心を各人が有する社会関係の形態、方向、質、結果(社会的相互作用)とし、この社会的相互作用をソーシャルワークの基礎的な焦点とする。各人と社会制度：個人と環境との社会関係に織りなされる相互作用領域(an interactional field)の検証や社会資源との関係にも関心を向けていく。ソー

シャルワークは、効果的な相互作用を進めるために個人や集団の持つ能力とともに、効果的な社会的機能のために寄与する観点からみた社会資源にも活動の焦点を求める。これを二重の焦点とし、ソーシャルワークの3つの機能をあげている¹¹⁾。

ベームのいう社会関係や社会的相互作用への視点は、ソーシャルワークの目標との関係のみならず、ソーシャルワークの事象に対する認識の対象とその範囲、対象認識の視点や仕方を提示するとともに、それがソーシャルワークの機能や活動とも結びつけられている。

すなわち、ソーシャルワークの機能として、①回復、②資源の確保、③予防という3つの機能をあげている。第1の回復機能は、社会関係の崩壊と損傷をもたらしている相互作用過程における諸要因の統制、除去などの機能で治療的や更生的とみられるものである。これには、相互作用過程のパターンの再組織化や再建を含む。第2の資源の確保の機能は、社会資源の充実、改善、調整などで、この第2の機能は、社会的に承認されているソーシャルワークの本質部分であり、ソーシャルワークを存在たらしめる重要な機能という。すなわち、ソーシャルワークは（個人と環境との間の）良好な社会的相互作用のために社会資源の創出を全面的に発揮するというのである。第3の予防機能は、効果的な社会的機能を妨げる条件や状況の発見、統制、除去にあるという。この機能は個人と集団の間の相互作用領域に生じる問題の予防と社会的疾病の予防とに分けられている。前者は、問題の発生、再発、悪化の要因除去、統制、追跡、問題発生しやすい部分についての予測と予防措置、後者は、相互作用の問題発生に関するデータの収集と解析から前出の第2の機能と結合して社会的健康に寄与するものである。実践過程において3つの機能は完全に分離できないとみる¹²⁾。ベームの主張は、いわば三つ巴の機能論によりソーシャルワークの多様な実践レベルでの社会変革的機能論を備えた広範性と包括性を示し、下位レベルの機能やソーシャルワーカーの役割論へと広がる可能性を備えるものである。

ソーシャルワークの「活動」については、前出のゴードンの作業定義批判（1962）でも見られたが、ベームの場合、すでに構成要素の一つに「方法」という用語を使用していない。ソーシャルワークの活動は、ケースワーク、グループワーク、コミュニティ・オーガニゼーション、経営管理、調査研究などの方法を通じて、直接、間接にサービス受給者の利益につながるものである¹³⁾。つまり、方法は活動の下位におかれていることになる。なお、活動で重視されたことは、①問題の解析、②問題解決のための計画、③計画の執行、④結果の評価である。それは各方法に共通する活動の過程ないし段階といえよう。

以上のようなソーシャルワークの基本的な「価値」、「目標」、「機能」、「活動」などの概念を通して、ベームは、次のような定義を導き出している。「ソーシャルワークとは、人間と社会の相互作用を構成している社会的諸関係に重点をおいた諸活動をすることによって、個人がもっている社会的機能を高めることである。これら諸活動は3つの機能に分類することができる。それは①損傷を負った能力の回復、②個人的資源と社会的資源の確保、③社会的機能の予防、である¹⁴⁾。」

ソーシャルワークの活動の焦点は、専門的介入において、社会関係、社会的役割遂行の領域に限定した側面であり、ベームはこれを他の援助専門職にはないソーシャルワークに独特なものとしている。ベームの論考も、作業定義批判と検証に見られた諸要素間の関係及びソーシャルワークとは何かを論じている点でソーシャルワークにとって重要な認識論であろう。

3) パートレット著『ソーシャルワーク実践の共通基盤』（1970）

「作業定義」策定の委員長であったパートレット（1970）は、the common base of social work practice（ソーシャルワーク実践の共通基盤）を著し、作業定義批判や当時のそうした事が生じる背景としてソーシャルワーク概念の欠如、それが統合的思考の障壁となっていることを指摘しつつ¹⁵⁾、思考し認識することを基盤とし多様な技術を擁する1つの専門職業であること、その強みを探求した。方法に依拠し、共感し実行するに重きを置いた実践を方法・技能モデル method-and-skill model と称し、専門職モデル（professional model）への転換を主張する¹⁶⁾。それがソーシャルワーク実践のための「統合的思考」を備えた専門職モデルの基本的な構成枠組みを論じ、本質的要素や共通基盤、その活用論に結実する。

パートレットは、ソーシャルワーク実践を全体として理解するための本質的要素を「価値の総体」、「知識の総体」、「介入のレパートリィ」（Interventive Repertoire）とし、これらの相互の関係を「ソーシャルワーク実践の本質的要素」、さらに「ソーシャルワーク実践の共通基盤」を図式化している¹⁷⁾。

共通基盤では、ソーシャルワーク実践が「社会生活機能」（生活状況に対処している人びと、社会環境からの要求と人びとの対処努力との均衡）を「中心をなす焦点」とし、状況に巻き込まれている人々に対する第一義的関心としての志向（Orientation）をもち、具体的な実践において、人間の可能性や成長に関する人々への態度をさす「価値の総体」および、（人々や状況などの）理解の方法である「知識の総体」が、個人や集団、社会的組織に直接に、そして協働の行為を通じて働きかけるときに「介入レパートリィ」を導くとする。介入レパートリィ

は、ソーシャルワーク全体に属すものであるゆえに、別個の技法（テクニック）に分割しないで単一概念として示される。価値と知識はソーシャルワークの強みが生み出される源と位置づけ、図式は、実践の意味ある分析のための「包括的な視野（view）」を備えるものとして示されている¹⁸。

パートレットがソーシャルワーク実践の共通基盤で示したことは、実践といえ、これまで慣例として方法に依拠してきたが、そうした伝統的な思考とは異なるものである。それは、価値や知識および介入に関連する概念、一般化、原則、すなわち、抽象的な観念 idea からなるとする。こうしてソーシャルワークの実行の土台である基本的な認識枠組みを明示し、技能モデルから専門職モデルへの転換を果たし、方法優位を明確に転換している。パートレットの共通基盤は「doing ではなく、何が doing の基礎をなしているか¹⁹」を表したもので、統合的思考としての枠組みを映し出したものである。

なお、パートレットは価値については、第一委員会が価値と事実の二分法に立ち、価値は実証できないとしていたが、価値が知識になりうることや価値と知識の区別や両者の関係を展開しながら、両者の活用を重視する。なお、科学と調査で立証された知識をハードの知識、実践者の扱うものをソフトの知識とする表現もみられる²⁰。

作業定義とその検証、ベームやパートレットの論稿が、以後のソーシャルワークに重要な影響を与えたことはいままでのない。3つの論稿は、我々にソーシャルワーク実践とは何であるかを認識する体系的な構造の重要性と必要性をあらためて考えさせてくれる。しかし、これまでソーシャルワークにおいて認識のための体系性を備えたものを形成し、それが認識構造であるとして可視化してきただろうか。次章において、認識構造モデルとはどのようなモデルか、検討する。

3. 実践の認識構造モデルとは

シーファラ（Sheafor, B.W., Horejsi, C.R and Horejsi, G. A., 2000）は、実践原則において、きわめて当たり前のことであるが、ソーシャルワーカーはソーシャルワークを実践しなければならないとした²¹。つまり、実践においてはソーシャルワークといえるかたちを成立せしめなければならないということである。それには、基本的なこととして、ソーシャルワーク事象に対する統合的な思考、実践のための全体的・統合的な認識枠組みをもたなければならないし、ソーシャルワーカーのしている行為がソーシャルワークというかたちとして認識できる構造の構築とその可視化が重要な課題となる。

ここでいうソーシャルワーク実践の認識構造のモデル

は、ソーシャルワークの基本的で体系的な構成を捉えることを可能にする型である。それはゴードンに見られたように、ソーシャルワーク実践とは何であるかという認識が反映された構造でなければならないであろう²²。

それには、作業定義批判された実践をどのように認識するか（how to recognize）ということも包含されよう。

仮説としての実践の認識構造モデルを、ソーシャルワーク事象に対する推論により実践対象を捉え、具体的な行為を熟練した技を通して展開し、ソーシャルワークらしい、ないしはソーシャルワークといえる、ある帰結をもたらす実践の全体像を包摂する認識の体系的な型としておこう。すなわち、それは、ソーシャルワークの成立像（成立の実像）が結ばれたということでもある。認識構造モデルは、ソーシャルワーカーのクリティカルな思考が事象に対して分析的に、総合的に、統合的に働き、実践という行為の全体像を構想し、描きながらそれを行為の中に具現化したもので、ソーシャルワークの成立した型をいう。認識構造モデルとは、いわば、ソーシャルワークの実践モデルとでもいえよう。それはソーシャルワーカーの内なる世界のなかでの原初的な構造物としてソーシャルワーカーの身の内で知的に出現し、ソーシャルワークらしさを求めて創造される。ソーシャルワークの実践は、それが現実化され外在化されることである。実践という行為はこのようなソーシャルワークらしい世界をかたちにすることを意味する。

そうして生成されたソーシャルワークのかたちは、ソーシャルワーカーの内なる世界で創造され外在化されるまでの過程において、関係し合う諸次元が存在し、これらの多様で動態的な変化を経て連結し合ったものとして捉えうる。それはソーシャルワークの実践を構成する諸次元がほぼ同時並列的に動き、関係し合いながら統合し、ソーシャルワークとしてのかたちを創り出す。そのさまを捉える、ないしは映し出す型が実践の認識構造モデルである。

今少し、実践の認識構造について言及する。ここでは、実際に実践という行為の起点からたどってみる。

実践は、実践主体＝ソーシャルワーカーの内なる世界において始まる。それは混沌とした（福祉）事象の知覚から始まり、知覚された対象世界の弁別・識別からソーシャルワークとしての具体的な行為化のための構想を導き出すソーシャルワーカーの身の内で生起する思考の作業過程を通して体系的に生成される。それはソーシャルワーカーをして外的な世界における具体的なソーシャルワークを成立せしめる知的構成物の集合体が表現されたかたちである。しかし、それは単なる静態的な集合体ではない。認識構造内では諸次元間で、あるいは、同次元間で多様な推論がなされる。論理性や整合性、無矛盾性の検討や決定と相まって、解釈や意味の了解についての

検討や決定などの思考の作業が起きている。これらがほぼ同時並列的に出現ないし継起していることが想定される。このような思考過程の成立を通して、ソーシャルワークのかたち（ある集束的なまとまり、ないしは、合成的な論理的構成物）が成立する。もっとも、ソーシャルワーカーの内なる世界において生じることがすべて論理的に秩序付けられた体系を備えるわけではないが、そこには混沌から整序された知的世界が開け、ソーシャルワークらしさの世界が成立することになる²³。

認識構造モデルは、現段階では仮説であるが、ソーシャルワーカーによるソーシャルワークの実践という営みをいかに可視化できるかを表すモデルである。同時にソーシャルワークとは何かを示すものである。それはまたソーシャルワークの実践の実証研究においても、ソーシャルワーカー自身の実践の振り返りや評価、スーパービジョン、ソーシャルワーク教育においても資することが可能であろう。

4. 実践の認識構造「7次元統合体モデル」

前章の実践の認識構造モデルをもとに、ソーシャルワークの実践においては7次元が統合体として成立していると仮定し、これを認識するモデルを「7次元統合体モデル」とする。この着想に重要な示唆をもたらしたのが前述の3つの論考であるとともに、7次元統合体モデルは筆者のソーシャルワークの価値や機能・役割、技能に関する研究成果の燃糸的な思考作業から主として形成された概念構成物といってよい。7次元統合体モデルについては、ソーシャルワークの基本構造として組み立て

たもので、具体的には名称は異なるが筆者が「ソーシャルワークの枠組みとスキルの関係図式」(平塚良子 2004)として技能研究において示したものである²⁴。しかし、その段階では素描止まりのものにすぎなかった。本稿ではそれを補筆し、7次元として説明を加えることにする。

ソーシャルワーカーが実現をめざす価値と具体的な目的を掲げ、内在する技能を表現しながら、ソーシャルワークの実践を展開するとは、どのような枠組みによるものなのか、技能とソーシャルワークの枠組みとの関係はいかなるかたちにできるか。こうした問いから概念図式の名称を仮説的な7次元統合体モデルと置き換えた。図1はそのイメージ図である。筆者は、このモデルの活用により、ソーシャルワーカーがソーシャルワーク実践をしているとはどのようなことを明示することができるとして「ソーシャルワーク実践事例の多角的分析による固有性の可視化と存在価値の実証研究」(研究代表平塚良子 平成17年度～19年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究C)研究課題番号17530420 研究成果報告書2008, pp.1-85)を行ってきた経緯がある。同研究の成果については、別の機会に譲る。ここでは、ソーシャルワーク実践とは何かを認識する構造的な7次元統合体とはいかなるモデルであり、それがどのような意義があるのかを示す。

すでに触れてきたが、ソーシャルワークの実践が成立していることをソーシャルワークの「かたち」が創られたととらえ、そのかたちは7つの次元から成るものとする。次元を用いたのは、ソーシャルワークのかたちを事物の空間的な広がりをもつ構成物として表すためであ

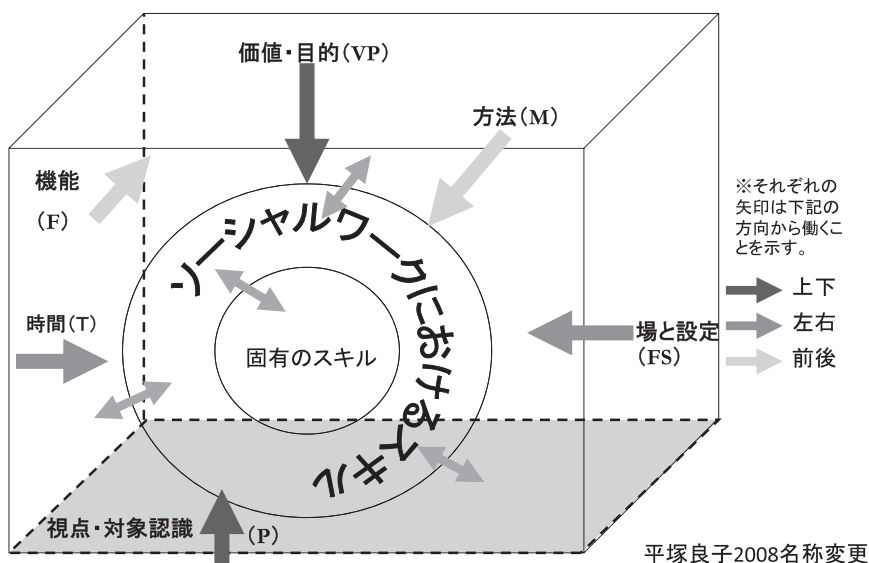


図1 ソーシャルワークの7次元統合体モデル

注：ソーシャルワークの7次元統合体モデルのオリジナルの名称は、「ソーシャルワーク枠組とスキルの関係」(平塚良子 2004)である。下記文献において用いている。平塚良子(2004)「スキルの構成原理」岡本民夫・平塚良子編『ソーシャルワークの技能—概念と実践—』ミネルヴァ書房 p.97.

る。各次元は、さらに、多様な下位レベルの次元から構成されることを想定している。下位レベルの次元は、体系的を備えるものもあれば、まだ、すべてが体系的ではなく不定形で多様な混成物もありうる。

ここで7次元統合体モデルに立ち戻って、各次元がどのように構成されているかを示す。7次元統合体は3つの枠組みから成る。

第一次枠組み

ソーシャルワークの実践は価値・目的と視点・対象認識という2つの次元が相互一体的に、かつ、連動的に機能する構成物である。第一次枠組みは、第二次枠組みを起動させる役割を果たす。

(1) 価値・目的 (Values and Purpose: VP)

価値は、実現が志向されるある理想的な状態・条件をさす。それは人間主体の諸行為を発動する源としての位置にあり、あるべき行為を導く判断基準としての働きをする²⁹。ソーシャルワークの価値という場合、究極的な価値(福祉価値)と手段的な価値(専門職の価値)とに分類できる。ソーシャルワークの実践では価値から具体的に設定される目的は、理論においても、実践においても要の位置にある。なおいえば、目的は知識の存在を借りることにもなる。価値の内容としては、生命・生活・人生を生きる人間の尊厳の尊重、人間の主体性や可能性への信頼を基礎に、人間の社会生活における社会的公正(社会正義)の実現、人々の主体的で自立的な生活の支援などがあげられよう。

本モデルにおいては、価値の範疇に属すものとして、理念的価値である福祉価値、実践として具体的な行為へと転ずるための専門職の価値を基軸としつつ、しばしば実践のバリアーとなりソーシャルワーカーに価値葛藤を

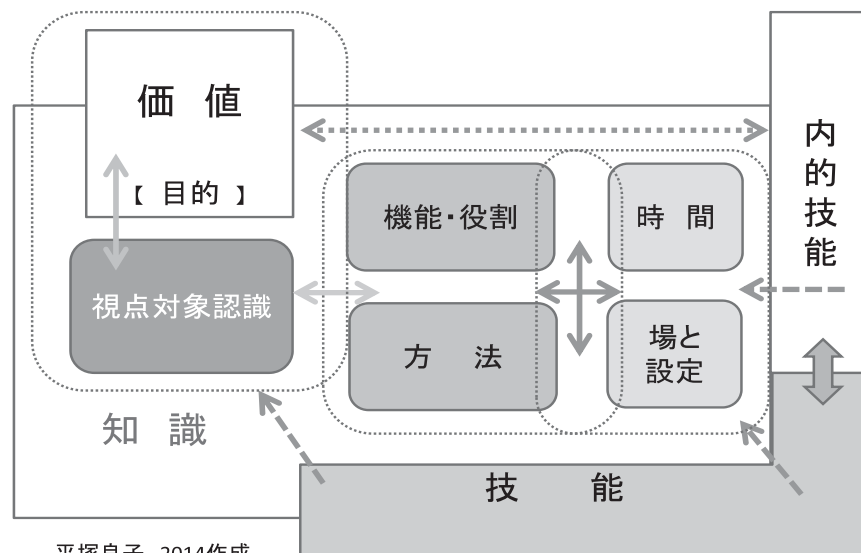
もたらす反福祉的価値(非福祉的価値)に対する抵抗・対抗・挑戦をも含む。この認識構造モデルにおける第一次元の「価値」(価値・目的)は、視点・対象認識と相互一体的に、照らし合わせが生じ、連動的に関連し合っ

(2) 視点・対象認識 (perspectives & P)

第二次元である「視点・対象認識」は、ソーシャルワーク事象に対して、そしてそれを実践対象として確定していくときの見方や考え方をさす。それはソーシャルワーカーの感覚に始まり、内省を通してある見解にたどり着く、いわば思考の到達点であり、事物の認識の仕方を意味する。それはまた、視点を多様にもちながら遠近図法や透視図のように先を見通す展望を含む事物の捉え方でもある。ソーシャルワーカーはソーシャルワークの理論知を含む実践知を活かすことになる。視点・対象認識では自身の感覚とともに知識を活かすことになる。7次元の多くは知識が反映される(図2参照)。特にソーシャルワーカーが内的に保有する知識の量と質(広さや深さ)は事物の見方に重要な影響を与えるとともに、実現をめざすべき価値・目的に関わる判断に重要な役割を果たす。この知識をいかに創造し、革新させていくかが、ソーシャルワーク、ソーシャルワークの実践にとってはきわめて重要な課題である。ただ、自然科学分野と異なり、ソーシャルワークの知識には、法則定立、再現可能な知識レベルもあれば、すでに述べた事物の意味の解釈をとおして構築される了解型の知識レベルもあり、知識には幅があるとの立場をとる。

第二次枠組み

第二次枠組みは、価値・目的と視点・対象認識から織りなされ、起きていることを変革するために困難な状況



平塚良子 2014作成

図2 知識の構成と6次元との関係

に関わる介入という行為の枠組を意味する。それは、2つの枠組みに大別できる。1つは、3次元の「機能・役割」(Function-Role)と4次元の「方法」(Method)である。2つ目は世界の基本を形作る時間と空間(時空間)であるが、第5次元の空間を場と設定(Space:Field-Setting)とし、第6次元を時間(Time-Process)とする。時間や空間を単に概念レベルのものとして捉えるのではなく、ソーシャルワークの介入という行為の形成の一角をなすものと位置づける。

(3)機能・役割 (Function-Role)

機能・役割は、選択された価値・目的の実現のために(厳密に言えば、視点・対象認識と相互に関係付けられたうえで)の機能・役割であるが、実践という具体的な意図的な行為として果たす働き、ないし作用をいう。上位のソーシャルワークの機能としては、個人や社会の変革機能の遂行、そのためにソーシャルワーカーが現実化する行為として遂行する機能・役割がある。ここでは、ソーシャルワークとして価値の実現のための上位機能、そこでより具体化されるソーシャルワーカーの役割と、役割に付随して実施される諸機能までを「機能・役割」に含める。

(4)方法 (Method)

方法は、ソーシャルワークの価値を実現するためになされる一連の手続きを意味する。この方法については、周知のようにソーシャルワークのなかで主役のような位置を占め、役割を演じてきた。ソーシャルワークの方法は、ミクロ、メゾ、マクロレベルの方法を備え、その一環として多様な実践モデルやアプローチが長らく開発されてきた。今日もそれが続いている。このこと自体、重要であり、否定されるものではない。本モデルでは、方法は介入に従属するものと位置づけいくつかの次元の一つとして扱うとともに、ソーシャルワークの機能・役割との関係において選択されるものとして位置づける。

(5)空間：場と設定 (Space: Field-Setting)

ソーシャルワークの実践においては空間の存在を無視できない。ジャーメインによれば、「空間は物理的で心理的な構成物であり、その大きさと質は、環境の知覚に影響を与え、また環境との相互作用に影響を与える」という⁷⁹⁾。作業定義ではソーシャルワーク実践の構成要素としてサンクションがとりあげられたが、あくまでも権限に基づく認可された公共的機関や民間機関、専門職組織としてであった。これらは実践する側の限定された空間(場と設定)といえる。しかし、ソーシャルワーク実践において空間を考えると、実践に関わってくる場は広範で多様な世界が存在するとみる。本モデルでは、ソ-

シャルワークが展開される空間を重要な次元として位置づける。空間には、それを構成する多様な場と機序が存在する。そこで空間を本モデルでは場と設定と称する。

(6)時間：時間と過程 (Time: Time and Process)

人間の生活には欠かせない時計に象徴される物理的な時間は周知のようにわかりやすい時間概念である。それは、過去、現在、未来という不可逆的で方向が定まった形式的な時間でもある。しかし、時間はそのような時間概念ばかりではない、時間の流れ方や種類においても多様な時間の存在に気づく。ソーシャルワークにおいて、時間概念について多様な時間概念のあることを示したのは、生態学的視点を導入してライフモデル理論を構築したC. ジャーメイン(Carel B. Germain)である。ジャーメインは、時間の構成(texture)と周期があることを示している。個人・家族・組織・言語・文化・社会には独特の時間のありようをもっているという⁸⁰⁾。すなわち、生物学的時間、心理学的時間、文化的時間、社会的時間、ソーシャルワークサービスと時間、相互作用現象としての時間、人間の潜在的可能性から一つの方向に進む物理的時間とは別のもう一つの時間として不確かな未来への希望という時間概念も捉えている。生活過程と生活空間の両方に生態学的な時間の変数を役立たせうとする。実践においては、物理的時間に還元しえない、時間の多様性ととも、多元性や重層性についても認識する必要がある。また、時間の次元には、過程が含まれるが、そこには介入のタイミング(時機・好機)も関連する。なお、時間と空間は表裏一体的で相互に影響し合い、繋がりをもつ次元である。

第三次枠組み

(7)技能 (skill)

7次元の技能は、漢字の「技」(わざ)と「能」の2文字からなる。前者は熟練した技術が表出されたことを意味するとともに、後者は前者を表現する者の能力(実践能力)を含意する。ソーシャルワークをかたちとして示す場合には、ソーシャルワーカーのもつ熟練ないし熟達した技がソーシャルワーカーの実践能力(知的判断と具体化的な実践行為を展開できる能力。Competence)を経て発揮されなければならない。技能(スキル)の定義(平塚良子 2004)を次に示しておこう⁸¹⁾。

ソーシャルワークの技能とは、「クライアントの生活・人生における価値の実現に向けて、ソーシャルワーカーの自己の感覚・直観、生活・人生における経験、教育・訓練による学習経験・専門職としての実践経験などの経験知(実践知)を呼び覚まし、科学知識体系を選択的・効果的・創造的に用いることのできる実践能力の総体(コンピテンス)を通して具現される熟練した技(わ

ざ)をさす。換言すれば、技能は、ソーシャルワーカーの事象の認知・認識能力や価値実現に向けての援助行為の変換推進能力からなる実践能力が、ソーシャルワーカーをして具体的援助行為に示される熟練した統合的・体的技術表現を意味する。

なお、技能には二面性があることを看過できない。一つは、すでに客体的に知識化・技術化されているテクニカル・スキルである。他の一つは、それを習得したソーシャルワーカー自身の身から示されるアーティスティック・スキルである²⁹⁾。ソーシャルワーク実践の技能という次元においては、アーティスティック・スキルをしてテクニカル・スキルを表すのである。技能は、そのような特性をもちながら、ソーシャルワークの他の6次元すべてを動かしめる働きをする。実践全体を最初から最後まで支える作用をすることになる。しかしながら、もっとも重要な点は、ソーシャルワークの善と正義とする価値の実現のためにソーシャルワーカーが技能を駆使することであって、技能が主役となるわけではない。あくまで価値の実現のために従う次元である。

以上の7つの次元の動的な特徴は、図1及び2のイメージ図から参照可能と思われるが、多少の継時的なずれが生じながらも、実現を志向する選択された価値と視点・対象認識を基軸に諸次元がほぼ同時並列的に相互に関係し合い、部分的にも、また、全体的にも論理的に無矛盾性、整合性を保持しながらソーシャルワークの実践を成立させる働きをする。第一次枠組みの2つの次元の出現を契機に両者は互いに影響し合いながら、歯車をかみ合わせる如くに照らし合わせがなされ論理的に矛盾がなく整合性が保たれる。時間差は大して変わらないと考えるが、これらが第二次枠組みの4つの次元に影響する。4つの次元は前者の2つの次元と相互に関連しあうなかで論理的に整合性を保ちながらソーシャルワークの実践として具体的な行為化が図られる。これらの全実践過程には技能が適切に各次元に機能するという構造がある。むしろ、技能も他の次元からの影響を受けて示される内容は変化もする。このように技能の働きにより価値と視点・対象認識の出現を契機に、第二次枠組みの4つの次元が機能する。ほぼ同時並列的に出現をし、互いに他を形成し合い、統合されてソーシャルワーク実践の全体像がまとまりあるものとしてかたちづくられていく。

4. おわりに

認識構造モデルである「7次元統合体モデル」を導くにあたって、ソーシャルワークにとっての重要な議論となった作業定義、その批判的検証、同時期のソーシャルワークの本質論、その後、これらを集大成して構築され

たソーシャルワーク実践の共通基盤は、ソーシャルワークとは何か、その実践を認識するとはどのようなことかについて、重要な示唆を与えてくれた。方法優位に警鐘を鳴らした3つの論考はソーシャルワーク独自の価値、ソーシャルワーク実践の認識や知識構築に言及した点で意味がある。それらは60年から半世紀前のものながら決して古びたものではない。ソーシャルワーク、その学術性にとっては、貴重な影響を与える位置をもっている。これらの論考は、筆者が方法やアプローチとは異なる角度から、ソーシャルワークの実践をかたちとして認識すること、それには何を考えねばならないのかなどに関わる重要な示唆を与えてくれた。価値や機能・役割、技能の研究や事例研究は7次元統合体という認識構造モデルや実践の動的な関係を把握する上でのイメージ化に有用であった。導き出した7次元統合体モデルは現在、限定的な試みではあるが実証途上にある。

ソーシャルワークの実践は、ソーシャルワーカーの事象に対する推論過程から事象を統合的に捉えようとする認識構造にもとづく具体的な行為である。その認識構造が何かを把握することは、ソーシャルワーカーをして内発的に立ち現れたソーシャルワークの論理を見出さしめる。実践の判断根拠を内包するような論理がいかなるものであるかの解明、論理の集積とその解明がソーシャルワーク実践とは何か、さらにはソーシャルワークとは何かを可視化することに通じる点で意義があることが確認できた。とはいえ、紙幅の関係もあり舌足らずの面があり、これらのフォローについては他の機会に譲りたい。

注及び引用文献

- (1) Gibelman, M. (1995) *What Social Workers Do*, National Association of Social Workers, Inc. = マーガレット・ジベルマン 日本ソーシャルワーカー協会訳・仲村優一監訳 『ソーシャルワーカーの役割と機能』日本ソーシャルワーカー協会発行, pp.1-2.
- (2) Ginsberg, L. H. (2001) *Careers in Social Work*, 2nd ed., Allyn and Bacon, pp. 5-6.
- (3) 平塚良子 (2004) 「人間福祉における専門職」秋山智久・平塚良子・横山穰編 『人間福祉の哲学』ミネルヴァ書房, p.108.
- (4) Working Definition of Social Work Practice, *Social Work*, 3-2. April 1958 pp. 5-8 = H. M. パートレット著 小松源助訳 『社会福祉実践の共通基盤』ミネルヴァ書房。1978年刊行の巻末の参考資料「ソーシャルワーク実践の基礎的定義」として転載されている(pp. 251-254)。作業定義に関しては、小松の訳語では基礎的定義とされている。この定義の含意は基

礎的といえなくはないが、ここでは作業定義とする。

- (5) 松井二郎 (1975)「アメリカソーシャル・ワーク理論の最近の動向」『北星論集』第11号, p.61.
- (6) Gordon, W. E. (1962) "A Critique of the Working Definition," *Social Work*, Vol. 7, No. 4, pp. 4-5.
- (7) Gordon, W. E. (1962) *ibid.*, p. 11.
- (8) Bartlett, H. M (1970) *the common base of social work practice*, National Association of Social Workers, pp. 62-63. = H. M. バートレット著 小松源助訳, 上掲書, p. 59.
- (9) Boehm, W. W. (1958) *The Nature of Social Work*, *Social Work* vol. 3, No. 2, pp. 10-18. なお、同論文は次のソーシャルワークの論文集においても転載されている。Weinberger, P. E eds. (1969) *Perspectives on Social Welfare*, *Macmillan Co.* = 小松源助監訳 (1978)『社会福祉論の展望』(下巻) ミネルヴァ書房, pp. 8-25.
- (10) ベーム 上掲論文 pp.10-11.
- (11) ベーム 上掲論文 pp.15-20.
- (12) ベーム 上掲論文 pp.20-21.
- (13) ベーム 上掲論文 p.22.
- (14) ベーム 上掲論文 p.24.
- (15) バートレット 前掲書, pp.32-44.
- (16) Bartlett H. M., *op. cit.*, pp. 51-61. 小松源助訳書 pp.46-58.
- (17) Bartlett, H. M., *op. cit.*, p.82, p.130. 小松源助の訳書 p.81 及び p.141 には「調整活動レパートリイ」としているが原典のままを訳す。
- (18) Bartlett, H. M., *op. cit.*, p.129. 小松源助訳書 p.141.
- (19) Bartlett, H. M., *op. cit.*, p.129. 小松源助訳書 p.142.
- (20) Bartlett, H. M., *op. cit.*, pp. 63-65. 小松源助訳書 pp.60-62.
- (21) Sheafor, B. W., Horejsi, C. R. and Horejsi, G. A. (2000), *Techniques and Guidelines for Social Work Practice* (5th ed.) Allyn and Bacon, pp. 68-81.
- (22) Gordon, W. E. (1962) *op. cit.*, p. 4.
- (23) 「ソーシャルワークのかたち」については、次の論文を参照されたい。平塚良子 (2011)「ソーシャルワーカーの実践観」『ソーシャルワーク研究』Vol.36, No.4, pp.60-66.
- (24) 平塚良子 (2004)「スキルの構成原理」岡本民夫・平塚良子編『ソーシャルワークの技能 その概念と実践』ミネルヴァ書房, p.97.
- (25) 平塚良子 (2004)「人間福祉の価値」秋山智久・平塚良子・横山穰編『人間福祉の哲学』ミネルヴァ書房, p.72. なお同論文においては、価値について詳細に展開しているので参照されたい。また、価値を科学の対象(研究対象)と捉えるべきとする主張は、

次の論文でも展開している。平塚良子 (1999)「価値の科学化 その意味的考察」嶋田啓一郎監修、秋山智久・高田真治編 ミネルヴァ書房, pp.88-102.

- (26) カレル・ジャーメイン他著 小島蓉子編訳著『エコロジカル・ソーシャルワーク』カレルジャーメイン名論文集, 学苑社, 1992, p.43.
- (27) カレル・ジャーメイン他著 上掲書, p.24.
- (28) 平塚良子 (2004)「スキルの意味」前掲書, pp.10-11.
- (29) 平塚良子 (2004) 前掲書, pp.11-12.

その他参考文献

- (1) Gambrill, E. (2001) *Social Work Practice: A Critical Thinker's Guide*, Oxford University Press, 1997.
- (2) ハリー・スペクト/アン・ヴィックリー 岡村重夫・小松源助監訳『社会福祉実践方法の統合化』ミネルヴァ書房, 1980.
- (3) マーガレット・ジベルマン 岩崎浩三・山手茂監訳『ソーシャルワーカーとは』日本ソーシャルワーカー協会, 1993.